

萱野地区(六)

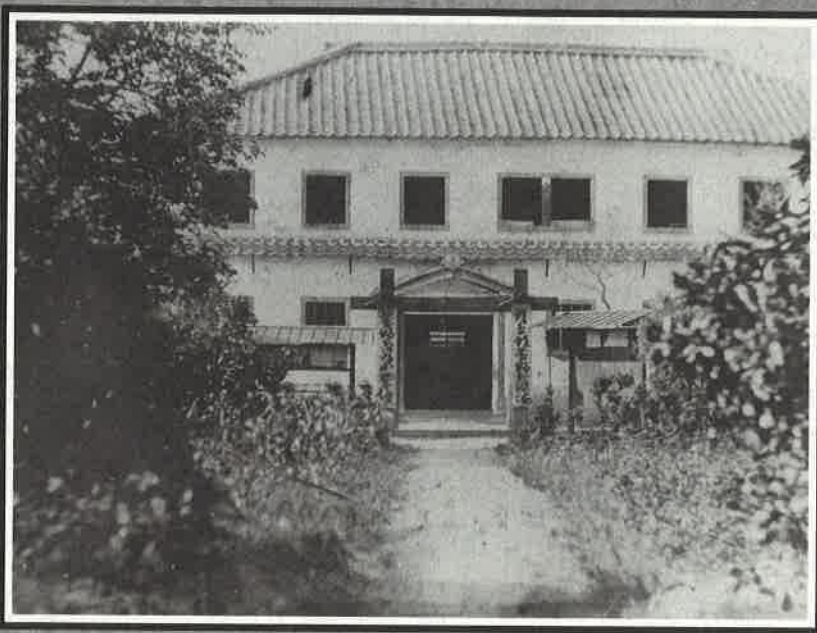


前号で紹介した鎌倉時代から室町期に登場してきた集落名は、今も其面町の地名として継承されています。地区の原型などはこの時代になると大体できあがっていたことでしょう。地名は歴史を尋ねるうえで大切な手掛かりになる「生きている文化財」といえます。

萱野地区も、十六世紀の終わりにころになると様相が大きく変わりました。戦国の乱世を統一した豊臣秀吉が、全国支配の要

つくりに行つた土地と農民政策によるものです。その一つが「村切」といわれるもので、萱野郷・萱野村と呼ばれていた地域を二

稲・西稲の各村が誕生しました。この村々に「太閤検地」が実施されて、村ごとの全生産高村高という)が定まり、年貢を納



萱野村小学校内にあった萱野村役場

一の区画に分割して、新しい村を設置しました。そこから如意谷・東坊島・西坊島・白鳥・石丸・外院・今宮・西宿・芝・東

める基準となりました。こうしてできた村々です。これらは為政者が政治的につくつた行政村といえるでしょう。

一方、中世社会で地区や集落のリーダーとして活躍してきた萱野氏や如意谷氏らの有力住民たちの多くは、地区の再編成の中で土地や集落との関係を断ち切つて(兵農分離)、武士への道をたどりました。そして彼らは主君の「国替」に従つて、先祖以来のふるさと萱野地区から新しい任地へと移つていきました。

萱野地区一カ村の領主たちは表のように変わつていきましたが、江戸時代を通じて一カ村は常に一体の地域としてまもられていました。注目されるのは、時の領主が幕府・親藩・譜代大名で占められたことです。陸上交通の要路である西国街道筋を重要視した幕府の意図が、領主の配置からうかがえます。

江戸時代の萱野地区の村々は、北摂地方でも有名な酒造米の産地として発展しました。「萱野米」と呼ばれ、粟生米と並んで質の良さが酒造家から評価され、西摂地方の伊丹や灘が全国屈指の酒どころに発展したので、その地に近い其面が酒造米の生産供給地になったのです。こうして一カ村のうち東稲

村と西稲村が明治十六年に合併して稲村になり、明治二十二年四月一日には、地区の一〇カ村が合併して古代以来の郷名を継承した「萱野村」が誕生しました。

これは、近代国家の建設を目指した明治政府が、中央集権を進めるために全国町村の再編成を行つた「市制・町村制」によるものです。役場を萱野村小学校内に設け、同年五月二日には村長・助役も決まり萱野村政がスタートしました。そして、昭和二三年八月一日に其面町と合併し、その行政区になりました。萱野村の発足から六〇年目でした。

(萱野地区は今回で終わります。次回からは豊川地区を連載します)

領主の変遷

- はじめ幕府直轄領
- 寛永11年(1634)仙洞御料(皇室領)
- 天和元年(1681)幕府直轄領
- 元禄7年(1694)武藏国忍藩阿部氏領
- 文政6年(1823)幕府直轄領
- 文政7年(1824)一橋家領